

50 太田正雄（木下柰太郎）の医学ノート
について

○黒川一郎・島田保久・吉田 信

演者らはかねてから太田正雄（木下柰太郎）の青年時代の文学者たるべきか、医学・医療の道を進むべきかについて、懊悩した歴史的事実を知っていた。また、医学生の人進を歩む途上で森鷗外の知遇を得て、何れかの道を選ぶのがよいかを訊ねたということも、かねて知っていた。

この時代の太田の周辺については、著作集のその当時の日記を見るしかないが、演者は偶然の機会に、伊東市の木下柰太郎記念館の太田哲二氏の知遇を得て、太田正雄の医学生時代のノートが保存されていることを知った。許可を得て、八十八冊に及ぶ、第一高等学校生から東大医学部を卒業する時に至るまでのものを借用できた。

現在検討中であるが、これまでの検討結果・印象を列挙すると以下の様である。

1 教育にあたった教授陣の多彩であること。

内科学では三浦謹之助・青山胤通・入沢達吉。外科学では塩田広重。等の当時の日本の代表的医学者で上層階級の医療相談をなし、彼らが修めたドイツ医学を中心にした当時の新しい成果が盛られている。

2 太田の記載は詳細をきわめ、欠席、ノートの抜け穴などが殆どみられない。医学学習に必須なノートの記載に精力を傾けた跡が顕著である。

3 一方、一高生時代から医学部卒業までの著作集に記載された日記を参照すると、彼はあまり医学およびそれを教授する講師陣への関心が薄いように見受けられる。

同じ時期の彼の文学活動は活発であるが、医学の学習にもそれなりの努力をしていたと思う。日記にはあからさまに興味を示している様子はあまり出現していないこの両者の関係は興味深い、今回は立ち入って検討し得なかった。

4 医学生時代の太田（木下）は、

二十二歳 新詩社同人、夏季休暇に九州旅行。

二十三歳 森鷗外の知遇を受ける。「緑金暮春調」を中央公論に発表。

二十四歳 戯曲「南蛮寺門前」を発表。雑誌「屋上庭園」創刊に関与。

二十五歳 「食事の唄」諸篇刊行。美術・絵画批評を始める。

二十六歳 「昂」に戯曲「和泉屋染物店」

この様に文筆活動が盛んであるが、一方に於いて医学生としても決して投げ遣りに医学を修めなかつた積極的な態度がノートの記載にも歴然と現れており興味深い。

5・当時の医学水準を知る上で今日の様な、医学ジャーナリズムが発達していなかつた、明治末年の頃を知る上で、大変興味深い内容であると思われる。

結語…このように太田の医学ノートは当時の医学水準と彼の文学・医学の間にゆらいでいた心理を知る上で示唆するものが多いと思われる。

演者等は今回は、内科学各論及び臨床講義を中心に、青山胤通、三浦謹之助、入沢達吉教授らの筆記ノートを

分析し、当時の内科学の当時の水準を知り、現代のそれと比較検討してみたい。

参考図書

- 1・木下柰太郎著作集より「日記」
- 2・杉山平一『木下柰太郎―ユマニテの系譜―』、一九七四、平凡社、東京。
- 3・加藤周一「木下柰太郎の方法」、『加藤周一著作集』、No. 6・一九七八、平凡社、東京三〇五―三三三頁。

(1) 札幌医科大学)

(2) 島田整形外科)

(3) 北海道医史会会長)